

追跡、石川五右衛門

第六回 若竹笛躬ほか『木下蔭狭間合戦』（五幕）（文政七本）

永吉雅夫

The Chase of ISHIKAWA GOEMON (石川五右衛門)
the 6th installment: "KONOSHITAKAGE HAZAMA KASSEN (木下蔭狭間合戦)",
by WAKATAKE FUEMI (若竹笛躬) and others

Masao NAGAYOSHI

(1)

石川五右衛門を主題とする演劇脚本を収録するテキストとして、昭和初年代に春陽堂が刊行を始めた日本戯曲全集のうちの一冊に『石川五右衛門狂言集』（注1）がある。すべて四編収められた作品の一つは「木下蔭狭間合戦（五幕）——義太夫の五右衛門——」である。編纂者で解説を執筆している渥美清太郎によれば、しかし収録テキストは「文政七年六月、河原崎座に上演したときの台本」だという。すなわち、歌舞伎としての上演台本である。そもそも「木下蔭狭間合戦」はやく寛政元（一七八九）年二月十一日、道頓堀大西芝居（豊竹此吉座）で初演された全十冊の浄瑠璃作品で、作者は若竹笛躬・近松余七・並木千柳である。歌舞伎にとり

こまれて以来、上演の実際の必要などさまざまな事情のもとに書替上演されてきたもので、文政七（一八二四）年まで三十五年が経過している。

この文政七年六月の歌舞伎台本の構成は、全五幕で以下のようになっている。

序幕 芥川の間
二幕目 矢矧の橋の間
三幕目 犀ヶ崖来作住家の場
四幕目 壬生村の間
千本松原の間

大詰 志賀別業の場

これをもとの浄瑠璃「木下蔭狭間合戦」全十段の場割構成と対照してみると、

一冊目 芥川

四冊目 矢矧橋

五冊目 来作内（犀ヶ谷の段）

九冊目 治左衛門内

十冊目 足利館門前

足利御殿

をそれぞれ利用したものであることがわかる。そして、それがなにを意味しているかといえば、この名題に示唆されている木下藤吉郎と、信長の桶狭間の戦いという二点のうち、桶狭間の戦いに関連する話題を切り捨てるということである。取り上げられなかった章段は、斎藤道三・義龍の父子の闘争および軍師竹中半兵衛（作品では官兵衛）の知略に関わる内容であった。すなわち、それらを除くことは全体を石川五右衛門物として整齊しようとする意志の表明である。だからこそ『石川五右衛門狂言集』に収載されたのであろう。それをかりに文政七本と呼ぶことにして、そこではどんな五右衛門像が描かれたのか、以下に検討してみよう。

（一）

文政七本は各場を内容としてたどってみると、五右衛門の出生、

成長、帰還、そして出自の自覚と悪行、此下藤吉との対決というふうにとまどめることができる。すなわち、作品の現在に至るまでの五右衛門を時間の順にたどっており、その時点までの五右衛門の一代記となっているのである。いわゆる五右衛門の物語としては捕縛と釜煎りの部分が描かれない一代記である。

さて、序幕はまず出生について因縁話を構成して、のちの伏線としている。

雨の吹きしぶく芥川のほとりで、金策に困り果てた壬生村次左衛門は、折からの雷鳴に気を失った奥女中しがらみを介抱する。しがらみは、「西国方のお館に、宮仕への者」で、「お主の胤を身に宿し」たがゆえの「奥様の、恐ろしい妬み事」から逃れて、知り合いに身を寄せる道中だと事情を語る。親切心から介抱した次左衛門ではあったが、懐中の「金財布」に手が触れて、悪心が兆す。次左衛門は、しがらみ所持の懐剣で彼女を切り殺し、「金財布」と「袱紗に包みし系図の巻き物」を奪うのである。しかし、あたかも臨月を迎えていたしがらみの「無残や死骸の疵口より、生れ出でたる産声」に驚いて立ちもどった次左衛門は、「しがらみの死骸の疵口より、赤児を引き出す」と、せめてもの罪滅ぼしとばかり、この赤子の養育をしがらみの死骸に誓う。

もちろん、この赤子こそ長じてのちに石川五右衛門となるのだが、本人は自分のこういう出生の経緯を知るはずもなく、もと「河内の石川村」の出で、今は「壬生村」に住んでいる次左衛門を親として、放埒な成長をほしのままにする。「河内の石川村」に五

右衛門を関連づけるのは、はやく松本治太夫正本以来である。それをここではさらに「壬生村」と結びつけたのは、浄瑠璃「木下薩狭間合戦」の初演にあたっての「壬生寺出開帳と、壬生狂言興行を当て込んだもの」で、さらに壬生狂言における猿および盗人への連絡、加えて壬生狂言の「餓鬼責」が五右衛門の釜茹でに重なり合うことが指摘されている(注2)。文政七本にあつては、初演時のその凝った趣向は五右衛門の釜茹でを連想させる部分が、やはり活かされている。手配の五右衛門の人相書きが煮えたる釜の中に落ちて、ぐらぐら煮られるのである。

次左衛門が石川村から壬生村へ越してきたのは何ゆえか、それは不明である。「河内の石川村」では「兎も角も暮らした身代」であったのが、「七八年」前に「この壬生村へござつてから、引続いての不仕合せ」、すなわち次左衛門は盲目となり、女房は去年亡くなったという設定になっていて、そういう家への五右衛門の帰還は、葛藤の内実を家族関係に由来するものにする。「十一年後、俵めが取って走った五十両」、融通をうけたその返済のために次左衛門が娘小冬を鳥原へ身売りさせるというちようどその日に、五右衛門は「鼠衣に鼠の頭巾を冠りて、頭陀袋を首に懸けて、鉦を敲きながら」という僧形の扮装で門口に立つ。しかも「今日二日」は去年亡くなった母の祥月命日という念の入りようで、そうした事情を知らされた上の、妹小冬の鳥原への身売りである。迎えに来た廓の男にむかつて、この話しはなかったことにすると、五右衛門は「五十両のところへ二百両」の金を「ぐわらりと投げ

出す」という豪儀な風を見せる。驚きつつも訝る次左衛門に、五右衛門は平然と「イヤモ、日本国中の金は、みんなおれが物でござんすわいの」と言い放つ。

この不敵なセリフが意味する五右衛門の現在は、手配の人相書によって明らかにされる。人相書にはお尋ね者の風貌が次のように描かれている、「年の頃二十二・三、背の高さは五尺六七寸で「色白にして鼻筋通り」、「苦みある面体。右の耳際に槍疵あり」と。そして、この風貌の男こそ「盗賊の張本、石川五右衛門」と次左衛門に念を押されて、「オ、おれが事だ」と五右衛門は悪びれることなく応える。さすがに次左衛門と小冬はびっくりして、このとき小冬が手にもった「絵姿を取り落し」、「この絵姿、前の釜の中へ入り、煮える仕組み」になっている。浄瑠璃が「魂消る釜の、湯に取落したる絵姿の、爛れ煎りつく大焦熱」と語り上げて、五右衛門の末路としての釜煎りを絵姿に代行させて先取りすることになる。

今は石川五右衛門を名乗る次左衛門の息子は、幼名を友市という。次左衛門が小冬を鳥原に身売りさせるのは、「十一年後、俵めが取って走った五十両」、穴埋めに融通をうけたその返済に困ったことであつた。十一年前の出奔後どうしていたかは、二幕目矢矧の橋の場に描かれる。

矢矧橋のたもとに二人の少年が眠りこけている。目を覚ました、見ず知らずの二人は、ともに「面白い夢を見た」と、それぞれの見た夢を語る。ひとりが「なんでも日本国の金が、すっぱらばん

と、おれが懐へ、入った夢」を語ると、もう一人は「イヤ、おれが夢とて、その位な段ぢやない。唐も日本も、たつた一呑みにした」と思ったら目が覚めたと自慢する。そこへ犀ヶ崖来作が手勢を引き連れ通りがかり、誰何されて、二人はつぎのように名乗る。一人は「年は十二、名は猿之助、愛知郡中村の者でござんす」、もう一人は「河内の石川村、年は十三、友市と云ひます」と。その後、ふたりは「盗人の大将」犀ヶ崖来作のもとに身を寄せることになる。このエピソードは、矢矧の橋で日吉丸が蜂須賀小六と出会うという、太閤伝説としてよく知られた一件に、いまだ友市と名乗る五右衛門を割り込ませた形になっている。すなわち、たとえば『絵本太閤記』第一之巻は、△発端▽△日吉丸誕生▽につづいて△日吉丸見小六▽と展開するが、ここでは日吉丸をめぐるエピソードがこんなふうに記載されている。

「持萩中納言保藤卿」の息女は故あって、尾張の国の「弥助昌吉」の妻となり、「日吉権現」に男子出産を祈願する。その験があつて、やがて「或夜の夢に日輪懐に入ると見て忽ち懐妊し、孕事十三月、時に天文丙申正月元日寅の一天男子出生す」るが、「其とき屋の上」に霊星現はれ照す事白日のごとし、生長の後難戦の時に臨めば必ずこの星上にはれ凶を転じて吉となす事常に然り」というように、その懐妊、出産は奇瑞をともなっていた。それは「孕事十三月」に示されるとおり常人の出生とは異なるもので、すでに「此の児生まれながらに齒を生じ」という、生まれついでての異人の誕生であった。そして、よく知られているとおり、「其面猿に

似たり、名を日吉丸と号けれど猿によく似たりとて人みな猿之助とよび習はせり」ということで、さきの「猿之助」という名乗りはこれに因んでいる。

『絵本太閤記』では、その猿之助が「岡崎橋」（注3）で「尾州海道郡の住人蜂須賀小六正勝」と出会うことになる。蜂須賀小六が「或夜属手数多引具して岡崎橋を渡りけるに彼日吉丸此橋の上によく寝て前後もしらでありけるを小六通りさまに日吉丸が頭を蹴て行き過る」のを、日吉丸は黙って行かせはしなかった。

日吉丸目を覚まし大きに怒り、汝なに奴なれば無礼をなすや、我幼稚といへども汝が為に恥しめをかむるいはれなし、我前へ来たり礼をなして通るべしといふ、

蜂須賀小六はその「十二三歳の小児」にもかかわらぬ「幼き身として不敵の一言」に「感ずる」あまり日吉丸を取り立てようとし、日吉丸も「行くべき方もなく仕ゆべき主人もなし」というので、両者はいったんの主従の関係をもつのである。

太閤伝説としてよく知られたこうしたエピソードに、『木下蔭狭間合戦』は猿之助とベアになる人物として友市を並べるという脚色をほどこした。それは物語創作上の加上とでもいふべき操作であった。すなわち、安永七（一七七八）年四月の『金門五山桐』で秀吉のライバルとしての五右衛門がすでに描かれたのをうけて、そのライバル関係をずっと溯らせ、社会に出てゆく以前の少年時

に同じ釜の飯を食った猿之助と友市の二人という状況を設定したのである。

さらに言えば、『絵本太閤記』第一之巻は、小六が召し抱えたばかりの猿之助にさっそく「今宵奉公の手初めに然るべき豪富の家へ手引きして其方が器量を見すべし」と命じ、首尾よく略奪に成功したものの、目覚めた家人に猿之助が追いつめられ、あわや捕えられるかという危機に臨んで「手頃の石を井の内へ投込み」窮地を脱するストーリーを記している。それは、『木下蔭狭間合戦』文政七本では「花形御寮とて大美人、春永に恋慕れ、つの御駆け落ち」と、小田春永の清洲城をめざす斎藤息女花形姫を、追手の「斎藤の家の子」郎党から救う猿之助の機転に書き換えられている。猿之助は、花形姫の襦袢を脱がせ、「傍への石を上衣に包み、川中へ其まゝに」投込んだのである。それを花形姫の入水と真に受けた追手の者たちが川へ飛び込んで搜索するあいだに、友市とともに彼らが脱ぎ置いた着物を奪って、猿之助と友市は手柄を下げて来作の砦へと向かうことになる。

『木下蔭狭間合戦』文政七本にあつて、猿之助・友市ふたりは矢矧橋で偶然出くわし、折り重なるように眠りこけて、さきに紹介したようにそれぞれの将来を暗示する夢見を物語る。そして、犀ヶ崖来作のもとで「常から仲の悪い同志」と言われるほどの、事ごとに張り合うのである。

たとえば、猿之助が「こんな者を拾うて来ました」と言つて「三面の大黒」像を取り出す。来作の娘さまは、それを見て「この三

面の大黒さまは、出世すると云ふ事」だから信心するように猿之助に諭すが、「出世」と聞いて、友市が「おれにくりやれ、おれが貰つた」と割り込んでくる。それに対して、そまが「その三面の大黒さまは、三千人の頭に立つとの御誓願」と説明をすると、猿之助は「たつた三千人の頭になるのかえ」と不満を表わし「友市、われに遣るぞ」と譲つたところ、いったん欲しがつた友市も「例へ三面にもせよ、高が人の作つた物。おれも否ぢや」と押し返す場面がある。ふたりが互いに夢に見た望みに対して、三面の大黒像が利生とする「三千人の頭」はスケールが小さすぎるのである。結局、押し付け合うふたりにかわつて、そまが引き取つて「三千世界に又とない、可愛い男」という婿願いを託すことになる。その結果得られた婿が蓮葉与六を名乗る、じつは「足利譜代の忠臣、仁木刑部左衛門国安が倅、同苗太郎国定」であるがゆえの因縁物語は後述する。

この三面の大黒天像も、出世前の出来事として太閤伝説を彩るエピソードである。『絵本太閤記』は初編第二之巻に「藤吉郎為趣尾州需鎧」と題して、それを記している。松下之綱は「松下」の姓を与えようとし、また川村治右衛門の娘きくと縁組みさせるなど、藤吉郎の取り込み、家中への引留めをはかる。「容儀嬋娟」のきくは、藤吉郎の「かたち醜きをきらへども」主命には逆らえず、夫婦となった。松下が鎧調達のために藤吉郎に、故郷のこととして「尾州」へ行くように命じる。その時、きくが「よき折と思ひ一先離別」を願うのに対して、藤吉郎も「離縁」状を渡したう

えに「別れの験」として取り出したのが、「三面の大黒天」像であった。それは「先年秋葉権現の神前」で拾ったものだが、「抑々此尊像は弘法大師の御作にて是を信仰せる者は必ず三千人の司と成るよし」言い伝えられている。妻は女に身を要せず、むしろ「和主信心して立身をも祈給ふべし」と勧める。ところが、藤吉郎は「我望みはかかる小さき事にあらず、是を所持して更に用なし」と、傍らの石めがけてこの尊像を投げつける。すると、それはまるで「一塊の灰を投げたごとく微塵になつて飛び散たり」、それをもって「此人天下を掌握すべき祥瑞なり」と後にぞおもひ合はせたり」と記している。

ここには『絵本太閤記』という書物の性格のある一面があらわれている。たとえば『真書太閤記』の叙述に比べると、ある種の簡略化が見られるのである。さきの叙述を例にとれば、「三面の大黒天」像をどのように手に入れたか、また「微塵になつて飛び散ることがどうして「此人天下を掌握すべき祥瑞」と言えるのか、『絵本太閤記』は説明していない。あたかも、そんなことはすでによく知られている、と言わぬばかりである。あるいは、『絵本太閤記』の作者が先行の作品に照らして叙述をすすめた、と言つてもいいかもしれない。『絵本太閤記』は七編八十四巻の大部ではあるが、それでも『真書太閤記』の十二編三百六十巻の長大さに比べると、抄録の感は否めない。

『真書太閤記』は「多く尾濃の間野老僧夫の口碑に抛りたる所多」く「間亦荒唐不稽の談多く事実を誤まるものも少からず」とされ

る一方、「頗る考証に資すべきものあり」とも評されて、栗原柳庵は「広く諸書と参訂し」て「重修真書太閤記」（注）の一書をなした。その初編卷之六に「藤吉郎氏を木下と改むる事、竝之綱藤吉郎に婦を嫁する事」とあるのに続いて、卷之七は「藤吉郎大黒天の像を砕き大志を顕はす事」を述べる。それに従えば、「藤吉郎今年二十二歳」の「八月下旬藤吉郎松下の代参として秋葉山へ登りけるに下向の路地にして三面大黒天の像を得たり」とあり、「大黒天は福神なり是を信ずるものは千人の司となると云へり三面なれば三千人の頭となるべき瑞相」と説明される（卷之六）。そして、それは「永禄元年」（一五五八年）の前年のことで、この「三面大黒天の像」のエピソードに続けて、藤吉郎の「菊と云ふ十七歳松下家人川村次郎右衛門と云ふもの、娘」との縁組が述べられる。夫婦仲は『絵本太閤記』も記すとおりで、菊は鎧調達のための藤吉郎の尾張出張を奇貨として暗に離縁を求める。藤吉郎は「三面大黒天」を菊が「手にだに取らず」いるのに対して「あざ笑ひ」て、つぎのように語る。

我こ、ろざす處今汝に知らしめん、三面の大黒天を祈り三千人の頭となるを樂む我にあらず、大丈夫の一心いかで大黒の力を仮るべき、三千人は云ふに足らず四海の人の頭となるべき所存なり、此像は土を以て製したる物なり、実に心中の占となさん、能く見よと云ふま、に彼大黒天を石の上に居ゑて大なる鉄槌をもつて打ちければ微塵に砕けて散乱せり、藤吉

郎莞爾と笑ひ一面一千人の司となると云へり、今斯微塵に砕きし一つを以て一千人づゝの頭たるべし、汝ひろひ取りかぞへ見よ、凡日本六十余州の人数は猶不足ならん、是こそ我望むところなれ(原文に読点を補った。―引用者注)

「微塵に砕」けた一つ一つが「一千人づゝの頭」を意味するとしたら、という藤吉郎の言葉は、妻に向けられる形で読者に対する説明にもなっている。そして、このエピソードは藤吉郎を嫌って離縁を望んだ妻が、後年、「浜名の土民の妻」となって生活したという後日譚を記すことで、いわゆる「覆水盆に返らず」で知られる太公望伝説をなぞった太閤伝説となつてもいるのである。また、文政七本で友市がやっぱり要らないと言うときの「高が人の作ったもの」という落ち着きの悪いセリフが、『真書太閤記』の「此像は土を以て製したる物なり」との藤吉郎の言葉を利用したのであることがわかれば、その落ち着きの悪さも理解されるといふものである。

(二)

こうして秀吉・五右衛門の十二・三歳ころからのライバル関係を構想した『木下蔭狭間合戦』にあつて、ふたりの対立・葛藤の基軸は、将軍足利義輝と、管領職をとつてかわつた三好長慶との間の緊張と抗争関係に由来する。そのいわれはオフステージのこ

ととして、与六の口から明かされる。

足利の義種公、同じく義晴公、御仲不和とならせ給ひ、義種公は淡路へ蟄居の砌、雌龍雄龍と云へる二振の劍、我が父刑部密かに預かり奉る。然るところ、三好長慶が計らひにて劍を渡せと数度の催促。承引なきを憤り、数百人にて館を囲み、切つて入る非常の切尖。屈せぬ達人、難なくその場は切り抜けしが、無念や雌龍の劍を奪ひ取られし武名の恥辱。日数を経るとも取返し、雌雄を揃へ立帰らんと、一通を書き残し、身退く某。

さきに記したとおり、この与六こそじつは「足利譜代の忠臣、仁木刑部左衛門国安が倅、同苗太郎国定」である。与六はこの「雌龍の劍」探索のために、「忍びの術に妙あり」という来作の高名を聞き、「忍術」伝授を受けるべく「入り婿」の介添えを口実として来作を訪ねたのであつた。ところが、当のおそまが「三面の大黒天」の利生とばかり、与六の方に「三千世界に又とない、可愛い男」を見て、縁組成立となる。そこで、与六は来作に問われるままに、素性を明かしたのである。

このとき、傍でこれを聞いていた友市と猿之助は口々に、長慶のところから雌龍の劍を「盗んで来る事」をせひ自分に「云ひつけて」ほしいと訴え、来作が「兩人に云ひつけてやる」と、ふたりは先を争つて駆け出して行く。「道の丸木橋」の上で小競り合

いを演じて、猿之助は「足踏みはずし谷底」へ落ちる。友市は、それを見て「よい気味しよ」と「足を早めて」行くのだが、谷底へ落ちた猿之助の幸運は知る由もなかった。

ふたりが飛び出していった後、来作は箱を取り出し、与六に「その中で、こなたの差し料、気に入つたを髯引出に」と刀を選ばせる。与六は、中に「目貫鯨鞘柄頭、鏢は元より覚えの信晴、父の刑部が秘蔵の一腰」を見つけて、さあらぬ態にそれを選んで褒めると、来作が入手の経緯を物語る。「三年前霜月下旬」雪の夜陰に乗じて「この刀を帯せし旅人を」「オ、サ、身が手に掛けて討ち放した」と語つたのである。かくて「親の敵」が現在女房の舅と判明、逆に来作から言えば娘にとつた婿の「親の敵」が自分ということ、そこに親としての「思ひ入れ」がある。来作は「勝負と名を名乗れ」と果し合いを演じながらも、「打ち合ふ白刃の音に驚ろ」き、ふたりが中へ「あはてふためき分け入」るおそまが、「只一討ちと来作が、振り上ぐる刀の柄、取りつい」たその「娘の手を持ち添へ左の脇腹、我が手に突ッ込」んで、娘に婿の「親の敵」を討たせるのである。来作は自分もと「甲州武田に仕へたる、加藤清澄と云ひし者」で「忍術に妙得」を示し「とび加藤とも蓮葉とも」異名を得たことがあり、その「忍術の一卷」はどうやら「二人の童め」が掠めていったようだが、「三好が館へ遣はせ」たのだから、「雌龍の剣を奪ひ返し、盗んだ二巻取返して、髯どのの、家の秘蔵に致されよ」と遺言する。聞いて与六は「舅どのの義心」に感謝し、「忍術の一卷」に加え、雄龍の剣を所持した父がここ

で討たれ谷底に突き落とされたとわかれば、「雄は即ちこの谷底」にあるということだから手に入ったも同然、「これも偏へに舅どの、御恩を戴く心」で名を「蓮葉与六と改めて尺未來まで変らぬ夫婦」を誓つて、来作に報いる。

この内容はすでに駆け出していった友市のあずかり知らぬことだが、競り合つて丸木橋を滑つて谷底へ落ちた猿之助には僥倖であった。この三幕目幕切れ、「盗賊ども」の「来作と云ふ張本」を捕えるために「捕り手大勢」がこの山砦に押し寄せてくる。与六が力戦して「捕り手の人数を門口の外の丸木橋の上に追ひ出したとき、ちようど猿之助が谷底から「上がりながら、丸木橋を切り落とす」結果、彼らは難を逃れるのである。そして、谷底から上がつてきた猿之助は「雄龍の剣の袋入りを腰に差し」ていたのである。与六の眼がそれを見逃すはずはない。無言のまま、「皆々見得よく、山嵐し、カケリにて、よろしく」幕となる。

さきに示した与六が語つた二振りの刀剣と將軍職の襲位をめぐる物語は、実際の政治情勢をふまえて脚色されているので、史的な整理をしておきたい。年号日付は『足利家官位記』（注5）による。

「義種」と記されるのは、足利將軍家第十代の義種（初名は義材のち義尹、諡号惠林院殿）のことで、延徳二（一四九〇）年十一月に征夷大將軍に就いた義材だが、將軍職の地位は安定したものではなかった。いわゆる明応の政変（明応二年、一四九三）で越前へ逃亡、再起を期して比叡山東坂本まで軍を進めるも敗退、今度は大内義興をたよつて周防国まで落ちてゆくことになる。結

果、明応十年（一五〇二）征夷大將軍を辞する。三十六歳であった。そのとき義尹と改名。雌伏の数年を過ごして、大内義興の後ろ盾をうけて、永正五年（一五〇八）帰洛を果たすと、七月一日に再び征夷大將軍の地位に就く。永正十年（一五一一）名を義植と改めるも、しかし、同十八年（一五二二）三月に淡路へ下り、八月大永改元の同年十二月二十五日にはふたたび「罷征夷大將軍」の羽目に陥り、大永三年（一五二三）四月九日阿波の撫養の地で生涯を終える。五十八歳であった。

明応の政変に際して、堀越公方政知の子の義退は、明応二年四月二十八日従五位下に任ぜられ十五歳で陣宣下をおこない、同六月六日には名を義高と改め、義植と対立する管領細川正元に擁立されて明応三年（一四九四）十一月二十七日征夷大將軍となる。文亀二年（一五〇二）七月には義澄を名乗る。しかし、細川氏の内紛と義植の上洛により、永正五年（一五〇八）四月十六日都を「出奔」、永正八年（一五一一）八月十四日「江州岳山」に三十二歳の生涯を閉じた。

そして、この義植と義澄とのあいだに足利家重代の家宝の伝授が伝えられている。明応二年五月六日の日付で「義材、伝家の鎧刀を足利義退に授く」（注6）とあり、『蔭涼軒日録』に「五月六日、御小袖并二銘等暮夜一色式部少輔殿爲御使者、持以見謁當相府」と詳述されている。すなわち、明応の政変で、もと管領畠山政長と正覚寺にこもった義材が、一色式部少輔を使者として、足利家伝来の甲冑「小袖」と「二銘」すなわち「二つ銘則宗」の劍

を差し出してきたというのである。

文政七本は、これを伝授された義澄にふれずに、義晴の名を挙げている。義晴とは永正八年（一五一一）三月生まれで、半年もせぬうちに父と死別することになる、義澄の子である。そして、大永元年（一五二二）十二月二十四日元服、二度目の將軍職に就いていた義植が「罷征夷大將軍」のあとを襲って、十一歳で征夷大將軍に就く。こういう経緯を文政七本は「御中不和」と表現したのである。また、作品の現在は、義晴が天文十五年（一五四六）十二月二十日に征夷大將軍を息子の義藤に譲った後の時点になっている。

すなわち義藤は征夷大將軍就職の後、天文二十三年（一五五四）二月十二日に義藤を義輝に改めている。十九歳であった。作品は義輝当代の物語である。

足利家重代の家宝の刀劍について、羽臯隱史『詳註刀劍名物帳』附・名物刀劍押形（注7）には（徳川一引用者注）八代將軍の享保四年己亥霜月本阿弥家より光徳以来の控帳によりて上下二冊に綴り久世大和の守を経て奉りしもの」という「刀劍名物帳」の引用があり、次のように記されている。足利家重代の家宝とする刀劍はすべて三振りあって、それぞれ「鬼丸国綱」「二つ銘則宗」「大傳多三池」の銘をもつが、うち「二つ銘則宗」についての記述を見てみよう。

京都將軍家御重代尊氏公より十三代義輝公へ傳り鬼丸、大傳

多同時に義輝公より秀吉公へ進せらる早速愛宕山へ御納候。

ほかの二振りについての記述を参照して、羽臯隱史は「義輝公は義昭公の誤りなり」と指摘しているが、最後の將軍義昭の前にそれらの刀剣を所持したのが、半年ばかりの十四代將軍義栄ではなく、義輝であったことも同様に推認できる。

家督相続における伝家の重宝としての刀剣、そして笛や系図の巻物などは、その紛失と探索というストーリー展開によって江戸期の物語に常套的な小道具である。この作品でも、刀剣は雌龍雄龍の二振りの太刀として、その入手が直接的には藤吉郎と五右衛門のあいだで競われる。それは將軍家と、さきに記したように將軍職の地位を在京すらかなわぬくらいに不安定なものにさせるほど勢力の伸長を見せた管領細川晴元、またその被官として結局、細川氏にとつて代わつて畿内に威令をふるつた三好長慶との対立を代理するものでもある。また、笛と系図は、五右衛門の出自から品物として重要な役割がふりあてられている。それは後述するとして、まず將軍義輝と三好長慶との関係を史的に整理しておこう。

『永祿記』（注8）は、「古今將軍家并管領其外 天下に權威を震族。時代移り替るありさま」について「ある草案に蟄居せる老人」が語る内容を「若輩」が書きとめるという体裁をとっている。永祿は元年が一五五八年で、一五六九年の十二年で元龜に改元となる。ちなみに、この永祿改元じたいが、朽木に逃れていた義輝の

將軍職の有名無実化を露呈した。室町期にこれまで「朝廷を代表する天皇と幕府を代表する將軍の合意によりおこなわれていた」（注9）改元の行事が、このとき、義輝ではなく三好長慶が幕府を代表するものとして実施されたのであった。『永祿記』は、冒頭、「光源院殿」すなわち十三代將軍義輝の「御自害」から始められる。

抑光源院殿御自害。同御舎弟鹿苑寺。及其外諸侯討死の事。其濫觴は細川右京大夫晴元被官三好筑前守長慶。是管領の權威を請て。五畿内其覚あり。誇て累代主従の義を忘れ。既右京兆に敵をなして晴元殿股肱（羽）翼と存ずる臣。肩をならぶる朋輩たりといへども。摂州江口におゐて天文年中に悉討果す。依て細川家没落。絶言語者也。弥驕を窮め。万松院殿。朝倉を御相伴衆に被召加。其例証を尋て御供衆を望。其以後三好長慶御相伴衆に進て。松永彈正少弼久秀御供衆に被准之。重々恣之義也。忝も直參して猶もつて可致馳走の処に。還て公儀違背せしむるのみなり。

管領細川晴元の被官であった三好長慶が「御供衆」から「御相伴衆」へ昇進して、將軍直參の権力者となつていく下剋上の過程を苦々しく述べているが、義輝の「自害」は一五六五年「永祿八年五月十九日」のことで、三好長慶はその前年永祿七年七月四日に居城としていた河内飯盛山城で死去しているので、義輝討伐には関わりがない。しかし、その死は永祿九年六月まで伏せられ

ていたため、『永祿記』の記述は、その点、曖昧である。「摂州江口」の戦いは、天文十八年（一五四九）六月のことで、翌天文十九年三月七日義晴・義輝は近江穴太に逃れ、その地で五月四日に義晴が死去するも、三好長慶は同十一月二十一日義輝をさらに近江堅田に追放する。その後、天文二十一年（一五五二）一月二十八日義輝と和睦し、長慶は二月二十六日「御伴衆」に就任することになる。天文二十二年一月義輝とまた和睦するものの、義輝は和睦を破り三月八日、山城靈山城に籠もったので、長慶は攻略、義輝は八月五日龍華越に逃れ、さらに近江朽木に逃れる。永祿元年（一五五八）五月三日義輝・晴元が近江坂本に出陣、長慶側と幾度か小競り合いをくり返して、十一月に両者と和睦、長慶は永祿三年一月十七日義輝より「御相伴衆」に列せられる。このように義輝の將軍としての威勢の回復、自立のあがきに対して、常にそれを牽制し実質的な権力者であったのが三好長慶である。「御相伴衆」就任以後、嫡子義興ともども義輝とは友好的な関係を築いた。とはいえ、上記のような追放と和睦をくりかえす経緯ののち、三好長慶の死が伏せられている間に起った義輝殺害は、たとえば太田牛一『信長公記』にも、元和年間作成とされる『北条五代記』にも三好長慶の仕業と記載されたように（注10）、三好長慶のイメージを將軍弑逆の悪人として方向づけた。

「大話」志賀別業の場に暴かれる三好長慶の悪事は、そのようなイメージに基づいて造型されている。「管領三好長慶」は、「勅使」として「呉羽中納言氏定」になりすまして乗込んできた五右

衛門が「足利家へ大内から預け置かれた、太政官の御正印を返せ」との「勅書」をつきつけるのに対して、「余所目につくる忠臣顔」のもと、じつは「太政官の御正印」を盗み取っている。そして、「当所山王権現を、この別業に勧請なし、国家安全の万燈会」を行なうというのにも「深き計略」あつてのことである。すなわち、「某大望あるに依つて、義輝をそ、り上げ、家国安の祈りと号し、万燈は朝廷調伏の、それを越度に足利家を、滅亡させんず我が計略」をめぐらしているのである。「血判」を交わした一味の連中と、「幸ひ今宵、暗夜の神拝。折を見合せ、義輝を、我れく五人、手を下ろし、有無を云はせず、たつた一討ち」の手はずを整えている。

長慶のその国家転覆の野望を挫くのが、此下藤吉の役回りである。藤吉は「武将の御機嫌伺ひとして、小田春永が名代、此下藤吉、只今参上」と、この義輝の志賀の別業にあらわれる。「小田春永」は江戸の演劇に通用の織田信長を謂う名前である。

『真書太閤記』二編卷之六に「信長上洛將軍家へ御目見の事并三好長慶信長を探る事」の一条がある。「永祿四年秋八月織田上総介信長年来の望により都に上り將軍家の拜謁を遂げんがため忍びの上洛」を果たしたときの様子を記している。「尾州の織田と称する」者を「此儘に追却あらんも如何なり」と將軍義輝に取り次ぎ、「大紋烏帽子を著し威儀を繕ひ御前に畏る」信長にむかつて、「尾州は元斯波武衛の領国にして織田は斯波武衛の郎等職なり然るに近年威を国中に振ひ武衛を追出し国を押領せし由聞えたり」とその勢力の拡張を難詰してみせたのは、「時の管領代三好

修理大夫長慶」であった。ちょうど前年永祿三年（一五六〇）五月に桶狭間で今川義元を破って、一時に武名の上がった信長である。栗原柳庵はこのときの三好長慶の地位について次のように注している。

是時管領は細川右京大夫晴元なり然るに去る天文二十二年八月晴元三好長慶が為に芥川城に押込められ万機みな長慶が申行ふ処なり永祿四年正月二十四日長慶が長子筑前守義長御相伴衆に加はりやがて御紋を賜はり三月晦日將軍義長が亭へ成らせられしのち三好が威権頗る強大なりしかれども長慶老ひたるを以て政事を義長に譲る義長年若きが故その臣松永弾正少弼久秀権を専にし威を逞くす

長慶が御相伴衆に列せられたのは永祿三年一月だったが、その翌年には嫡男義長までもが御相伴衆となり、自邸へ將軍の御成りを受けるまでに將軍家との良好な関係、家格の上昇を示していた。そもそも「義長」もとの孫次郎は、義輝から足利家代々の通字「義」字の偏諱を許されて、改名したものである。長慶二十一歳の、天文十一（一五四二）年の生れで、永祿四（一五六一）年には二十歳ということになる。松永久秀は永正五（一五〇八）年生れで、大永二（一五二二）年生れの長慶よりもじつに十四歳年上したがって義長との年齢差は三十五、四十歳の長慶を「老ひたる」とすればそれよりはるかの年高なのではある。

さて、『真書大閤記』の記事に戻れば、長慶の難詰に信長は「言語をだやかにして事理明白なるのみならず威風凛々として」答弁を返したので、長慶は「その意に逆らふてはあしかりぬべし好を通じ交りを厚くして腹心の味方となさばや」と思いかえし、「信長を以て尾州の守護職に補せらるべしと執達」の結果、信長は「面目を施して退出す」とある。その後、長慶は「これを恩として味方となさんず籌作」をもつて「管領の館に招きよせ長慶自身立出様々もてなし」たが、將軍義輝の「我今その職にましますも四海静謐の威を振はせ給ふことも叶はせ給はず」と言つて「頻りに御落涙」の有様に接した信長は、「すべて三好が我意に募り將軍を蔑になすことを憤ほらせ玉ひての御ことと察し」て、「当座の尊敬」を返すばかりであった。長慶の思惑は挫かれたのである。

小田春永の名代としての此下藤吉は、長慶との対決の場では、舞台奥で「エイ」と掛け声もろとも「太刀音」をさせて、その後「国長の切り首を持ち、出て来る」ので、「長慶、見て、恟り」する。「何科あつて倅国長を手にかけた。仔細を聞かん」という長慶に、藤吉のセリフは次のとおりである。

我が君を害せんと忍び入りたる四郎国長、武將を守護するこの久吉、討ち取つたる上からは、云はねど知れし親子が悪事。汝に一味の大小名、残らず搦め置いたれば、謀叛の張本三好長慶、盗み取つたる御正印、渡して置いて切腹なせ。

じつは長慶の嫡子義長（のち義興）は永祿六年（一五六三）八月病気で早世する。したがって長慶に先立つ死としてはそうなのだ、藤吉の手討ちという最期は、さすがに足利家代々の通字「義」字の偏諱に憚ってか「義長」を、長慶の「長」に因む「国長」という名に改めている。

こういう三好親子の悪事、すなわち「義輝を亡き者にし、四海を握らん我が計略」に、石川五右衛門がどのように関わるのか。

(三)

四幕目壬生村の場では、五右衛門は「盗賊の張本、石川五右衛門」という現在の姿を示すだけではなく、出生をめぐる過去の因縁に向きあわされる。次左衛門が「その罪はこの親が引き受けて」と「子の為に捨てる命、獄門磔刑いとひはせぬ」というのを止めようとして、誤って「匕首、小冬の咽喉に当り」、小冬が絶命したとき、次左衛門は「怖ろしいは人の恨み。まっこの通り報はねば、ならぬ因縁因果経。これ見てたもれ」と言って、五右衛門に「仏壇の、内に供へし寒竹の、笛と系図」を渡す。それは序幕芥川の中で演じられた次左衛門による奥女中しがらみ殺しの際の遺品だが、その出来事こそは「はや二十三年後の今月今夜」のことで、「天道様の憎しみにて、月も変らず日も変らず、遂に娘が身に報ふ因果」を次左衛門は嘆く。それを語ることは、しがらみのその「疵口から、おぎやアくと赤子の泣き声。取り上げ見れば月も延びた

る、逞しい男の子」で、「亡者にキツと誓ひを立て、守り育てたは、われぢやわやいと」、「笛とその一軸、母御の形見」であることに五右衛門に教えると同時に、「この親仁は、其方の為には仇敵」であると知らせることもある。次左衛門と小冬が苦しい末期の愁嘆場を演じる傍で、しかし五右衛門は彼らには頓着せず、「系図の一卷を一心に見て」いる。

五右衛門の出生の異常さも、日吉丸の異人出生譚のヴァリエーションを意図していると言ってもいいだろう。そして、しがらみの口からは「西国方」としか明かさなかった「お主」は、ここに系図を見た五右衛門によって「こりやコレ、大内の系図書」とわかる。五右衛門は、「すりや、おれは百姓の子ではなく、九州大内の落胤か。ムウ。さすれば先祖は琳聖太子。」と、はじめて自分の出自を自覚する。

大内氏は足利幕府との関係で言うところ、さきにも記したとおり、大内義興が擁立して義種が二度目の將軍職に就いたし、次の義隆は西国随一の勢力を有した。その「大内氏のはじまりは、百済国聖明王の第三王子・琳聖太子と伝えられ、推古天皇の十九年、周防国、（今の防府市）に着岸し聖徳太子より周防国大内県を賜り、多々良を氏としたと言われて」おり、「大内」と称しはじめたのは平安時代、十六代盛房（もりふさ）のころ、本拠としていた所が「大内」という地名だったことが由来」と伝えられている（注11）。

異国に出自を自覚した人物が、日本という国家転覆、天下掌握

を企てる反逆者となることは、十八世紀半ばに流行する謀叛人劇に通常の設定である。ある体制の転覆を構想することは、対置しうるそれとはべつの体制、すなわち本朝に対する異朝を必要とする。それは謀叛人が抱懐する社会像というような次元の話ではなく、選択に不可避な論理上の要請としてである。代表的なものは、いわゆる天竺徳兵衛物だろう。その流行の端緒をなしたのは、宝暦七年（一七五七）正月二日から大坂大西芝居、大松百助座初演の、並木正三『天竺徳兵衛聞書往來』であった。この作品では、天竺帰りで蝦蟇の妖術を駆使する船頭徳兵衛はじつは高麗の臣下正林桂の子息七草七郎であり、三好長慶が將軍義輝の弑逆を企て、こと破れて切腹した結果、後事を託されて、その野望を引き継ぐのである。この後、宝暦十三年（一七六三）四月の近松半二・竹本三郎兵衛『天竺徳兵衛郷鏡』では、天竺徳兵衛は大夫家の家老吉岡宗観じつは関白久次を討とうとして失敗した朝鮮の木曾官の子であり、天竺徳兵衛物の集大成的な作品である文化元年（一八〇四）七月の鶴屋南北『天竺徳兵衛韓漸』においても同様、吉岡宗観じつは朝鮮の臣下木曾官の妻子大日丸という設定で、日本転覆の謀叛を企てる反逆者なのである（注12）。

母の形見の系図を読んで、「九州大内の落胤」ということは「先祖は琳聖太子」と自らの出自を自覚した五右衛門は、「これまでの望み」を変更する。

こりや、これまでの望みや変へにやならぬわえ。元より大名

小さひ奴、武将の望みもよしにして、これから望むは……ムウ……。ならば一生涯盗人暮らし。一日暫時の恩もない、誠の親より大切な、こなたを仇と討たれうか。

さきにも記したように、この文政七本は全十段の浄瑠璃『木下蔭狭間合戦』を整理して五段でストーリーをつないだ書替本である。もとの浄瑠璃と対照すると、割愛以外にも台詞や詞章に微妙な違いが多々あるが、この五右衛門の台詞については、ある意味、決定的で重要な変更が加えられている。「これから望むは」以下が、「ムウ」という思い入れを言葉にはしない表現になっているが、浄瑠璃本には「これから望むは万乗の天子ならば成ても見よふ」（注13）という文言があつて、五右衛門の「望み」が「大名」から「武将」へ、そして「万乗の天子」へと行き着く、言わば上昇的に肥大するさまを明らかにしている。さきに長慶の計略としての万燈会について、「某大望あるに依つて、義輝をそり上げ、家国安全の祈りと号し、万燈は朝廷調伏の、それを越度に足利家を、滅亡させんず我が計略」の文言を引用したが、浄瑠璃本では義輝自身の言葉として「武将の任官心に叶はず長慶が勧めによつて王位を望む此義輝、去によつて国家安全の祈りと言ひ立て誠は禁庭調伏の大願」（注14）があり、さらに妻綾の台にも「是非もなき御運の末足利長者の威にはこり勿体なくも禁庭へ弓引きたまふ逆心は天魔の見入るあさましや」（注15）の台詞があり、浄瑠璃本は王位篡奪の話題をタブー視していない。それに対して、この文政

七本は義輝失脚の口実としての「朝廷調伏」に過ぎず、長慶は王位を篡奪しようというのではなく、足利將軍家にとって代わるまでの野望である。そのことと、五右衛門の「ムウ」とは、作者の意識の上では対応している。

「ムウ」と言葉を飲み込んだ五右衛門が文政七本で示す行動は、まず「呉羽中納言氏定」という公家になりすまして「足利家へ入込み」「太政官の御正印を返せ」と「勅書」をつきつけることだが、それは「その印は疾より紛失してある噂」だから「云ひ訳がないから迷惑するワ。そこを付け込んで大金にするか、但し義輝に切腹させるか。どちらでも巧い代物」という見込みなのである。「大名」ではなく「武将」すなわち征夷大將軍という、変更したはずの望みを朝廷の権威を利用して実現するに過ぎない。この朝廷の権威という観念は、あるいは太閤秀吉とのペアリングにおいてなれば戯画的に五右衛門に付与される行動原理の一つなのかもしれない。いまは詳述する余裕はないが、この文政七本でも、呉羽中納言に扮した五右衛門は「御台姿の傾城芙蓉」に「見惚れてうつとりと、威儀も崩るゝ」だらしなさで、「御台の寝所」を捜しあて、しつぱりと色事ゆえに、手下の百介が忍術で姿を狎に変えて手に入れた「長慶が持つてゐた連判」状を、みすみす芙蓉に奪われてしまう。傾城と御台との入れ替わりという趣向は、五右衛門の色事が御台という上臈を相手と認めることよってより刺激されるありようを示している。

五右衛門と藤吉は大詰志賀別業の場で、勅使と勅使饗応役とし

て対面する。人払いをした座敷で、藤吉が「コリヤ、友市よく。見ぬ顔すないく」と呼びかけ、五右衛門が「オ、猿之助か」と応じて、ふたりは犀ヶ崖来作のもとの一別以来を語る。そして、それぞれ現在は「此下藤吉」で「日本を丸取りにしてからが六十余州、高の知れた、このくらいを立身とは、鬪るな鬪るな」、また「おれか。盗賊の張本、石川五右衛門」と明かすのである。藤吉は、四幕目の幕切れで暗示された次左衛門の保護というか確保を「藤葛籠」の形で五右衛門に差し出す。黄金三千枚の代りに、親仁を葛籠に背負って引き揚げろというのである。葛籠を背負う五右衛門という型が利用される。ここで両者引き別れるかというその時に、「御簾の隙漏る笛の音」が聞こえてくる。藤吉の指示で綾の台が吹く笛は、次左衛門が五右衛門に示した寒竹の一笛である。すると、「時に怪しや兩人が、帯せる太刀に声あつて、とうとうととして鳴り響く」。「笛は龍の吟する声」、藤吉と五右衛門の腰に帯びた剣が「共に音をなす今の奇特」、「足利累代雌雄の名剣、合体するは今この時」と、藤吉は五右衛門の雌龍丸を、五右衛門は藤吉の雄龍丸を、それぞれ「渡せ」と「詰め寄りく、双方一時に抜き放」す。そこへ国長が、「捕り手大勢連れて出て」五右衛門を取り囲むが、五右衛門は忍術で姿を消す。その後、手下の足柄金藏に葛籠を託し、五右衛門は「恋だく」と御台の寝所を目指すのだが、そのとき金藏がこんな葛籠を背負っては、この囲みをぬけられないというので、五右衛門は来作のところから盗んできた「伊賀流の、忍びの伝書」「一卷」を金藏に渡す。しかし、この足柄

金蔵はじつは「舅来作が家に伝はる忍びの伝書、盗み取つたる石川五右衛門、奪ひ返さんその為に、姿をやつし付き添い」機会をうかがっていた蓮葉与六であった。

蓮葉与六には、いや仁木太郎国定に関してはこのように「じつは」が二重に仕組まれていて、それでストーリーを進めるいささか安直な展開があるが、五右衛門が雌龍の剣をどのようにして手に入れたかも不明なままである。しかし、ともかく藤吉が雄龍丸を、五右衛門が雌龍丸を所持して対峙する部分が幕切れの場面である。

五右衛門が「拔身にて出て来」て捕り手大勢を相手に立ち廻り、「キツと見得」に決まったとき、「ヤア、盗賊の張本、石川五右衛門」と藤吉が声をかけ、それにつづけて「足利義輝」の名乗りがあり、両人が「見参々々」と登場する。国長手討ちを言う台詞に「武将を守護するこの久吉」とあったように、藤吉は義輝と連携している。だから、ここでも藤吉は「傾城芙蓉に申しつけ、色に事寄せ奪ひ取つたる、三好が党の連判状」を言い、義輝は「長慶が隠し置いたる太政官の御正印」を言挙げして、もはや長慶の謀叛の計略が事敗れたことを五右衛門につきつける。そこへ、藤吉に呼び出されて蓮葉与六が登場する。蓮葉は「謀叛の棟梁三好長慶を、某討ち取つて候」と「長慶の切り首を持」って現れるのである。

史実の上での長慶の死は永禄七年（一五六四）、すでにふれた通りなので、これは流布している義輝弑逆の悪人という長慶のイ

メージに従った造型である。そして、史実としての三好側による義輝殺害は永禄八年（一五六五）であり、両者のそれ以前の追放と抗争の繰り返しの歴史は永禄三年四年ごろを境として蜜月期に入るのである。

義輝と藤吉の連携に対して、ともに謀叛を企てている長慶と五右衛門の関係はどのように設定されたか。さきの藤吉と義輝の台詞がそれぞれ、連判状「これを以て佞人原を、手下に付けん汝が胸中」、また御正印「これも汝が奪ひ取らんと企み」とつづくように、五右衛門が長慶の上に立つて謀叛の成果を掠めようとするもので、結果的に両者は連携することなく、それぞれに挫折する結果となる。

それは、反逆、謀叛を企てる重臣に加担するという形とは異なる、異国に出自の自覚をもった謀叛人の系列に分類される野望である。たとえば、太閤記の世界に組み込まれた五右衛門の場合、そして五右衛門の刑死と秀吉との関係からして、五右衛門は秀次側の謀叛の企ての同調者であることによって秀吉の対抗者となることが基本のあり方である。そうした作品の普及を承けた『木下蔭狭間合戦』は、「奉公先の朋輩同志、あがき合つた竹馬の友」としての五右衛門と藤吉を描いたが、そのぶん物語の時代をさかのぼらせることになり、そこに見つけたのが足利義輝と三好長慶という対立だったのである。文禄三年（一五九四）とも四年ともされる五右衛門の釜煎りからすれば、ぎりぎり遡及可能な時代設定だったかもしれない。そして、もとの浄瑠璃には「武将はよし

にせい、万乗の天子になら」とあった文言は、この文政七本では幕切れにも「大望企つこの五右衛門、足利の世はこの手の内」と語られ、もとの浄瑠璃とは大きな違いを見せている。もとの浄瑠璃は「雌雄の剣も揃ふ」うえからは「足利の四海を治る小田春永」とくに「古今の名將此下藤吉」を誉めあげて「代代を経て久しかれとぞ寿ける」と定型の寿詞で結ばれる。もつとも文政七本におけるように対決が、「又重ねての再会には」「まづそれまでは」と猶予を見せて終るのも、定型ではあった。

『木下蔭狭間合戦』文政七本は実際に起った將軍弑逆を謀叛の失敗の形で描いたのだから、「万乗の天子になら」という王位の篡奪を企てる石川五右衛門を造型するなどありえなかった。弑逆や篡奪を江戸の文芸がどのように描いて来たか、『木下蔭狭間合戦』文政七本の石川五右衛門像はそうした視野の中でさらに検討されるべきであろう。

注1 春陽堂、昭和六年五月

注2 伊藤りさ『「木下蔭狭間合戦」試論―石川五右衛門像を中心に―』演劇研究センター紀要Ⅶ、早稲田大学21世紀COEプログラム、二〇〇六年一月

注3 矢作橋は、慶長六年（一六〇一）に初めて架けられた橋であり、慶長三年（一五九八）に豊臣秀吉は亡くなった。

注4 明治版帝國文庫『校訂真書太閤記』解題による。

注5 『群書類従』四輯巻第四十八所収テキストによる。

注6 『大日本史料』【編／冊／頁】8編908冊700頁、【綱文和暦】明應2年5月6日（14930050060）1条

注7 大正2年、金港堂書籍。引用は国立国会図書館デジタルコレクション電子公開テキストによる。

注8 『群書類従』二十輯巻第三百七十八所収テキストによる。

注9 天野忠幸『三好長慶』ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇一四年。

注10 天野忠幸『三好長慶』（ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇一四年）参照。

注11 「山口市観光情報サイト 西の京やまぐち」参照。

注12 この項『演劇百科大事典』第四卷／天竺徳兵衛物／金沢康隆を参照、平凡社、一九九〇年。

注13 早稲田大学演劇博物館浄瑠璃本データベース『木下蔭狭間合戦』10-0249による。

注14 注13に同じ。

注15 注13に同じ。